



海外アーカイブ・ボランティアの会 7月7-8日関東夏旅覚書

7月7日、8日と、海外アーカイブ・ボランティアの会では、関東地域のアーカイブ見学を企画した。見学先は、茨城県阿見町立予科練平和記念館、東京都港区の日本赤十字社資料室、東京都国分寺市の東京都公文書館展示室の3か所、参加者は5名。2日目の7月8日が安倍暗殺の日に重なったのは、何のめぐりあわせだったのだろうか。

2022年度海外アーカイブ・ボランティアの会の活動報告として、この関東地域アーカイブ見学の「夏旅」参加者及び見学受け入れ先の専門家からの感想をここにとりまとめる。

◇80歳の夏旅 ～戦争の記録を巡る～

大西 愛

2009年以来毎年続けていた「海外アーカイブボランティアの会」の活動は、2019年の夏のジュネーブ行きを終えてのち現在までコロナのために渡航できず休止している。

2022年はやっと行動が自由になったので、海外はまだ無理としても国内のアーカイブ関係の資料や展示見学することになった。これまで通り会員の自主参加としたが会員6人のうち5人が集まった。ことし80歳となった私も若い人たちに交じって参加した。

7月7日(木)は茨城県阿見町立の「予科練



平和記念館」を茨城県立医療大学の富田美加さんの紹介で見学した。予科練(正式名は海軍予科練習生)の名前を知っているだけで全く実体は知らなかった。

学芸員の豊崎尚也さんの丁寧なご案内によって初めて

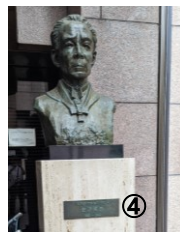
知ったのである。

毎日の生活や訓練の様子は土門拳が撮影したという。訓練生の表情には私の孫とほぼ同じ年齢の、まだ幼さの残る笑顔が見られる。その後におとずれる過酷な運命が胸に迫る。



7月8日(金)には東京都港区にある日本赤十字社の情報プラザで担当者の大西智子さんから展示の詳しい解説、資料の保存状況を川田恭子さんから説明していただいた。

赤十字社はアンリ・デュナンがイタリアのソルフェリーノで、戦場に負傷者がそのまま捨て置かれる様子を遭遇し、衝撃を受けて創設した。そういう海外の活動を知った佐野常民が敵味方の区別なく救済するという精神を尊く思って日本にも創立したという内容が説明を受けてよくわかった。



佐野は、大阪市内に今も建物が残る適塾で医学や蘭学を緒方洪庵から学んだ適塾生であり、私は何度も訪れた。今回の夏旅では、東京で佐野の胸像にお目にかかれた。今年の2月から続くウクライナと

ロシアの戦争で死傷者や被災した町の数え切れない画像が毎日のようにメディアから流れてくる。予科練やソルフェリーノの時から世界は何も学んでいないのではないかと落胆するが、諦めずに今の記録をしっかり残して、戦いを決して繰り返さないように次世代に伝えていかなければならないと強く思った夏であった。

【写真説明】

①茨城県阿見町にある予科練平和記念館 ②遺された日記、書簡(同館パンフレットより) ③アンリ・デュナン(赤十字社パンフレットより) ④佐野常民の胸像(日本赤十字社玄関) ⑤アンリ・デュナン直筆「ソルフェリーノの思い出」下書き原稿(複写)



◇予科練平和記念館見学の感想

完 ナミ

2022年7月7日、予科練平和記念館の見学に参加した。この見学は、海外アーカイブ・ボランティアの会が企画したものである。

私は見学前、「予科練」とは単に「正式パイロットになる前の基礎訓練を受けるための予備教育の場」だと想像していた。しかし、見学当日の展示やその後のホームページの説明などをみて、「予科練」の正式名称が「海軍飛行予科練習生」（以下、予科練生）であり、同時にその制度の略語であることが初めてわかった。予科練は14歳過ぎから17歳までの若い男性が「入学」するものではなく、「入隊」するものであること、予科練はふつうの旅客機パイロットではなく、軍備のためのパイロット養成課程であったこと、予科練生は日常的に軍人精神を身につけることに注力されていたこともわかるようになった。

展示室6では霞ヶ浦周辺で行われた空襲について、当時の予科練生が回想を語る映像が上映された。その証言映像から「戦争は二度とあってはならない」といった痛切な思いが伝わってきた。同時に、当時の予科練生たちが「本当の戦争」の怖さと辛さについて教わっていなかったのではないかと疑問がわいてきた。

昨今のロシアによるウクライナへの軍事侵攻だけではなく、今も世界各地では規模や形が異なる様々な紛争などが起きている。戦争に関わってきた様々な立場の人びとは、決して遠くの地域や過去の人びとだけではない。それどころか、今を生きるわたしたちにも争いはいつでも、どこにも起きている。その点も含め、博物館がそれらの発生原因や事実確認、責任所在などを明確に判断し、展示することは非常に複雑で難しいかもしれない。しかし、戦争は起きてしまえば必ずと言っていいほど多くの人々に深い傷跡を残してしまうものである。

予科練平和記念館は、予科練の歴史と地域の関わりを記録を保存、展示する阿見町立施設であり、命と平和の大切さを伝える博物館である。私はこれまでもいくつもの戦争関連の平和博物館を訪ね、その展示やリーフレット、ホームページなどをみてきた。それらにはしばしば「戦争が始まる」といった表現がみられる。だが、戦争がどうして「始まり」、どのように「終わった」かを、正面から問いかける展示は実はそう多くないと感じている。今回の見学を通じて、私が修士時代から学んできた過去の過ちへの反省の大切さと持続的な教育を重視する平和博物館の役割について、再び考えることができた。

見学の事前予約等を手配の労をとってくださった茨城県立医療大学の富田教授、当日展示を案内・説明してくださった阿見町・豊崎尚也学芸員に、この場を借りて心からの感謝の意を表します。

◇予科練平和記念館と赤十字情報プラザ

小川 千代子

7月7日午後、茨城県阿見町立予科練平和記念館を見学した。その印象をひとこと言うなら、設置者（阿見町）の伝えようとする圧倒的な熱意であった。当日ご案内の労をとっていただいた学芸員の豊崎直樹氏には、館内展示の隅々に至るまで確かな知識と深い造詣を踏まえた懇切丁寧なご説明いただいた。誠に、敬服するばかりであった。

キューブ基調のモダンな建物で内部は天井が高く、空が沢山見える設計だ。写真展示では土門拳の作品が多く用いられた。掲出の写真にはあどけなさの残る若者の澁漉とした表情が多くみられた。

展示された特攻隊員の遺書の一つに私の旧姓と同じ苗字の人のものがあつた。福岡県三井郡の家族あてだった。奇しくも私の祖父も久留米の出身で、後に上京して戸籍も東京に移動したと聞く。それでちょっと興味を惹かれた。ただ、親戚筋であるかどうかは確認できない。記憶の限り、その地に親戚はないと思うが、何やらご縁を感じた。

今回の予科練平和記念館見学は、高校時代の恩師江藤千秋氏の著書『積乱雲の彼方に』（後掲文献紹介参照）に描かれた戦時のありようを、ようやく知ることとなった。館内の土門拳の写真展示で若者たちの日常の笑顔を多く見た。建物の壁をくりぬいた窓からは青空を仰ぐことができた。土門の意図なのか、記念館の意図なのか、つとめて明るく若々しい予科練の人々とその組織を表現しようとする意図は明確であったように思う。その間隙を埋めるべく、歴代学芸員の皆様が今、オラルヒストリーを積み上げておられるという。この素晴らしい活動については、帰りの車の中で、この見学企画者の富田先生からうかがった。先生はその活動をととても高く評価しておられた。

翌7月8日、大西智子さんのご案内で、日本赤十字社赤十字情報プラザを見学した。ここは6月に続き2度目の見学。大西智子さん、川田恭子さんの博識に引き込まれてワクワクした。最後に記念写真撮影で盛り上がっている私たちのスマホに突然元首相銃撃、心肺停止の一報が飛び込んだ。驚いた。時刻は午前11時半頃だった。

その後当日夕刻18時頃、元首相死去のメールニュース。1963年JFK暗殺時の報道とも重なる時系列のニュース内容変化がひどく重苦しかった。

◇夏旅感想後日譚

■予科練平和記念館学芸員 豊崎尚也氏

当館でも資料の保存についてスペースの問題や、管理の問題など、日々色々な問題に直面しながら運営を続けております。

少しでも多くの方に予科練をはじめとする戦史の記録や阿見町の歴史を知っていただくため、これからも頑張っていきたいと感じております。

予科練平和記念館 <https://www.yokaren-heiwa.jp>

■茨城県立医療大学教授 富田美加氏

江藤千秋先生（後掲文献紹介「積乱雲の彼方に」著者）のことが知ることができてよかったと思います。先週、看護学概論という看護学科1年生の授業の最終回で(中略)予科練平和記念館のことや本学の歩みについても伝えました。

(富田様には、今回の予科練平和記念館見学を設定していただきました。ありがとうございました。小川千代子)

■日本赤十字社赤十字情報プラザ 大西智子氏

小川先生には社内理解促進のヒントとして「とにかく分かり易く、(赤十字社の歴史をもとに)大河ドラマ実現！もあり！」とお言葉を。

大西先生には「ICRC(国際赤十字委員会)というモデルがあるのよ！頑張っ！」。

金山先生には「技術と予算との兼ね合いなど、様々な選択肢を視野に慎重に検討を！」とお言葉と修復のアドバイスを。

ウォンさんからは「アーカイブズはじっくり時間が必

要！これからですね！」。

松村さんからはゼミでのご指導を含め、「プラザに何かがあるのか、明らかにすること！」とお言葉を。

私にとって誠にありがたく、心強く存じます。皆様がお帰りになった後、自分の中に勇気とやる気がみなぎるのを感じました。

日本赤十字社>歴史・沿革

<https://www.jrc.or.jp/about/history/>

赤十字情報プラザ <https://www.jrc.or.jp/about/plaza/>

➡見学でお邪魔する側は、その時の気分でいろいろな感想を述べてしまう。見学受け入れ側はその感想を翌日からの活動の道標として記憶にとどめてくださる。見学はする側だけでなく、受け入れ側にとっても刺激を受けるということは、見学側としてよく肝に銘じておく必要がある、このことを改めて自覚しました。あれこれその場での思いつきで感想を言い散らかしてしまいましたが、どうぞご容赦下さい。

最後になりましたが、ご多忙中にもかかわらず、私共の見学のご案内、ご調整を賜りました予科練平和記念館の豊崎尚也様、茨城県立医療大学の富田美加先生、日本赤十字社情報プラザの大西智子様、川田恭子様、大変お世話になりました。心からのお礼を申し上げます。本当に、ありがとうございました。(小川千代子)

◇◆◇アーキビストの消息(順不同)◇◆◇【凡例:●個人■機関】

●石崎康子氏(横浜市立歴史博物館)

7月15日、NHK TV「横浜ミステリー」中、横浜開港資料館所蔵写真資料説明で専門家として登場された。嬉しい！



●岩下ゆうき氏 Royal Australian Air Force Association WA Division (オーストラリア空軍協会 西郷州支部) Scanning Officer として8月から勤務。おめでとうございます🌸

●筒井弥生氏 Yayoi Tsutsui, CA(筑波大学アーカイブズ) ACA 米国公認アーキビストアカデミー役員(Nominations Committee Member) 就任、任期は

2022年8月から2年間。おめでとうございます🌸

●カルロス・セラノ・ヴァスケス

Carlos Serrano Vásquez 氏

8月1日付 ICA 国際文書館評議会事務局長就任、おめでとうございます。お世話になります。どうぞよろしく願います。🌸

[Secretariat Permanent Team | International Council on Archives \(ica.org\)](https://www.ica.org/)



●黒橋禎夫(くろはしきだお)氏

国立情報学研究所長 2022. 6.22 決定 2022.3.31 任期満了 <https://www.rois.ac.jp/info/20220622.html>

☆本コーナーへの皆様のご協力に心からお礼申し上げます。(ち)

●やぶにらみ文献紹介●◆▼●◆ ●図書◆論文▼逐次刊行物■その他●◆▼

●江藤千秋『積乱雲の彼方に—愛知—中予科練総決起事件の記録—』

本誌1-3頁掲載の予科練平和記念館を見学するにあたり、予習としてこの本を読んだ。旧制中学の3年生4年生5年生が大挙予科練に志願する様子、その中で家庭の事情で疎開、勤労動員に終始する著者の若き日々は、なんとも凄まじ

い。「戦後」の様子も含め、知らないことばかりが記されていた。著者紹介欄には、定年後に予備校に転じ、その後この本を著したと記されている。



実は、著者江藤千秋氏（以下江藤先生）は私の高校時代の化学の先生だ。個性が強い方に見えた。その江藤先生が自身の中学生時代の経験「愛知一中予科練総決起事件」を取り上げ、戦時の政治に翻弄された若者たちの様子を戦後まで含め、実話として綴っている。愛知一中(現愛知県立旭丘高校)の生徒の大半が雪崩を打って予科練を志願したところから始まり、負傷して戻った旧友の戦後の苦難の日々までを描いている。

この本は江藤先生の自分史であり、戦争時代への思いが行間に溢れ出る。その思いを私は初めて知った。現今のロシアによるウクライナ侵攻という世界情勢を見ながら、知らなかった昭和前期戦争時代に改めて思いを馳せる。

それにしても、なぜ私たちはこの時代について知らないのか。この「知らない」ということこそ、今日問題にすべき論点であり、著者江藤千秋先生からのメッセージだと思う。

この本は 1981 年に出版された。私はこの 7 月の予科練平和記念館の見学が決まり、ようやく「予科練」のキーワードからこの本を思い出し、著者江藤先生のことを思いだした。戦争が若い人にどんな影響を与えたのかを、江藤先生は私たちにきちんと知らせたかったのだろう。私は

高校卒業後半世紀余りを経てやっと、そのことを理解した。法政大学出版局 1981 新装版 2010,276p,1800 円+税

▼■南陀楼綾繁(ナンダロウ アヤシゲ)さん

本欄では異例ながら、今回文献ではなくライターのお名前を紹介する。このお名前との出会いは、日本の古書店メールマガジン第 352 号。

本欄前掲『積乱雲…』ではアマゾン経由で古書店の世話になった。そしたら、その古書店からメルマガ送られてくる。で、着信した第 352 号をスマホで開いてみた。その冒頭に「日本近代文学館 後編 蔵書収集と 3 人の古本屋 南陀楼綾繁」があった。その内容ではなく、南陀楼綾繁という著者名に筆者は仰天し、久しぶりにこのダジャレに感動した。著者名フリガナは「ナンダロウ アヤシゲ」だ。なぜ自称ダジャレ評論家の私が、南陀楼綾繁という著者名にそんなに感動してしまったのだろうか。特に私は綾繁=アヤシゲというのが、自分でも分からないけれども、非常によくできたダジャレであると評価してしまった。綾繁さんのブログものぞいてみて、できれば、綾繁さんとお友達になりたいと思うほど、気に入ってしまった。なんだかとてもトクした気持ちです。この際、思いつきだが、南陀楼綾繁(ナンダロウ・アヤシゲ)さんに DJI ダジャレ大賞進呈決定。 <https://twitter.com/kawasusu> (ち)

●千代子のあしあと●◆▼●◆ ●図書◆論文▼逐次刊行物■その他●◆▼●◆

▼DJI レポート No.129 20220831 20220831up, 5p. PDF 国際資料研究所 www.djichiyoko.com (本誌)

▼シリーズ「歴史家とアーキビストの対話」第 11 回 座談会『歴史学研究』2022 年 9 月号(座談会参加)

DJI 国際資料研究所の主な活動 2022 年 5 月 26 日～2022 年 8 月 25 日

<執筆>

DJI レポート No.129 20220825 A4 判 5 頁 PDF (本誌)

<主催>

8月7日 湘南 BBQ オンライン 参加5名

<出講>

5月28日 中央大学アーカイブ論、八王子市、東京

<参加>

6月3日 心の虫干しクラブ オンライン

6月25日、7月23日、8月20日 東海岸3丁目町内会役員会、市民の家、藤沢

7月17日 辻堂東海岸・太平台夏祭り実行委員会、市民の家、藤沢

8月3日 辻堂東海岸・太平台夏祭り実行委員会広報部印刷作業、市民活動推進センター、藤沢

8月19日 甲州ブドウ狩りと富士山五合目見学バス旅行

<見学>

5月29日 榎原考古学研究所博物館、奈良県(海外アーカイブ・ボランティアの会)

5月30日 榎原城址、高松塚古墳公園

6月1日、7月8日 日本赤十字社情報プラザ資料室(アーカイブ) 東京(海外アーカイブ・ボランティアの会)

6月30日 記録管理学会オンライン例会 zoom

7月7日 予科練平和記念館&翔雄館、茨城県阿見町

7月8日 日本赤十字社情報プラザ、東京都公文書館展示室

8月4日 中山小松家弔問 松本市

8月5日 松本市文書館訪問展示見学; 国宝松本城見学

<その他>

6月6,13,20,27日、7月4,11日 ルーマニア語のお稽古オンライン; 7月18日～8月29日夏休み

6月25日、8月19日 珈琲館曙ランチ

6月12日 八雲 オーケストラ定期演奏会、杉並公会堂

6月15日 aibiさんとランチ、横浜

7月16日 代々木果超会別会 国立能楽堂

7月26日 全史料協総会 zoom

7月28日 モンちゃん Zoom (海外アーカイブ・ボランティアの会)

8月1日 眼鏡新調 手元用と遠近両用 2本

8月4日 カネカ東京本社訪問

8月9日 浦霞、福寿、白馬錦吾みくらべの会、自宅

8月14日 小川家誕生日会 自宅

8月21日 家族写真撮影会、茅ヶ崎

6月～8月 金沢クリニック 6回 つるしげ歯科 3回 はじめクリニック 3回 (コロナ 4回目予防接種含) ほしの眼科 3回、マリソル整形外科&藤沢徳洲会病院眼科各 1回

■ 巻末随想

■ UNHCR ウクライナのエツコさん

エツコさんは、ジュネーブの UNHCR 食堂で知り合った。とても気さくで、明るくて、楽しい人だ。知り合ったのは、多分、2017 年頃だろうか。食堂に行くと、世界中の多様な人々が UNHCR に集っていることがわかる。胸に下げた名札で、他の機関で開催中の会議参加者なども、この食堂を利用していることもわかる。この多様な人々の中から、私たち日本人グループを見つけて、エツコさんは声をかけてくれた。キエフ(今はキーウになった)から来てるんです！と聞いたときは、キエフといえばロシアだと思っていた。その時エツコさんは休暇か打合せで、ジュネーブに来ているとのことだった。一緒に国連ジュネーブ事務所(UNOG)アーカイブに行き日本が国際連盟を脱退したころの資料を閲覧し、フランス語が堪能なエツコさんはフランス語の文書を見てとても面白がっていた。

そんな思い出の中のエツコさん、UNHCR キーウの現地事務所とか、ドンバス地方の事務所とか、ロシア語圏に長く勤務しておられると聞いていた。そこでメールを出してみた。エラーメッセージは来なかったので、多分受取人であるエツコさんは健在だろうと思う。エツコさん、今はどうしておられるだろうか？こんな心配させるロシアのウクライナ侵攻が疎ましい。政治と外交頑張って！

■ 150 年前から不変、赤十字社の正装制服

6 月 7 月で計 2 回見学した赤十字情報プラザには、赤十字の正装制服が展示されていた。紺色のワンピースのデザインが何となく鹿鳴館風。聞けば 150 年前からあるのだそうだ。



8 月 10 日、NHK のニュースで、皇后、秋篠宮妃らの臨席のもとで行われた、フローレンス・ナイチンゲール記章の伝達式の様子が報じられた。受賞者の一人は、あの伝統ある赤十字正装制服を着用しておられた模様。そうだ。こういう時こそ、伝統ある正装制服着用の機会と納得。華美に走らず、歴史ある正統性を静かに主張する制服は素晴らしい。情報プラザの大西智子さんから「男性用の制服もありますヨ」と伺った。

■ 富士火山学術資料館 休止中

8 月中旬富士山五合目を初めて訪れた。乗馬の馬、レストハウス、神社、駐車場などもある。レストハウスの裏手の入口脇に『富士火山学術資料館』の看板があった。だが資料館は見当たらない。

案内所の男性に尋ねたら、今は休止中、でもパンフレットがある、と、カラー両面印刷のパンフレットをくれた。これで、休止中の資料館の所蔵資料や組織がわかりそうだ。期待と楽しみが膨らむ。

■ 飛行機のおばあちゃん、孫にエールを送る!!

2008 年 11 月、筆者はジュネーブに UNHCR アーカイブ課長を訪ねるべく、飛行機✈に乗った。座席は中央 3 人席の左端、右 2 席には日本語がやたらと上手い白人の若いママと子供たち 2 人。子供たちはむずかることもなく、静かだった。上のコは 5 歳、下のコは 2 歳前。私は機内のゲームに打ち興じ、上のコと気が合った。10 時間余りのフライトで、私と上のコはテトリス合戦で大いに盛り上がった。私は 1 週間ほどで帰国したが、テトリス仲間のコたちは年が明けてから帰国する予定と聞き別れ際に電話番号を交換した。

お正月過ぎたころ、あの若いママから電話があった。上のコが私に会いたがっている、会えませんか、というお誘いだった。その電話以来、上のコと下のコは、私にとっては飛行機の孫になった。夏は湘南の海辺のプール、春秋は学校行事に顔をだす飛行機のおばあちゃん。上のコは大学生、下のコは高校生、飛行機の当時はいなかった 3 番目のコも 6 年生だ。

3 人とも今フツーに日本の学校に通っている。ただ、外見ハーフなので時に校則との軋轢もあるとか。

先頃孫は自分では選ぶことができない本人の髪の毛の色とか、幼児洗礼時のピアスとかを理由に学校から反省文を求められたらしい。でも、飛行機のおばあちゃん、これはどうにも納得しがたい。孫の外見を理由に「反省」を求める学校側(先生)の態度は、差別に起因してはいないだろうか。モヤモヤする。

飛行機のおばあちゃんは飛行機の孫を応援し、その心身の個性が大きく強く伸びて見事に花開くことを信じ、期待し、切望し、エールを送る。

フレー、フレー、飛行機の孫！

(ち)